里山集落の持続可能性と
その現代的価値の再発見

和歌山県那智勝浦町　色川地域

色川地域振興推進委員会

中山間に位置する里山集落

- 平家の落人伝説が残り1000年の歴史を有する。
- 明治22年、10ヶ村をもって色川村。昭和30年、大合併にて那智勝浦町となる。
- 鉱山が栄た頃には人口が3,000人程。鉱山の閉鎖以降人口減少、高齢化が進む。
- 休耕田の増加や山林の荒廃が進み、「むらの消滅」への危機感が高まっていく。

移住者を受け入れ半世紀

- 1975年有機農業を志す移住希望者の訪問
- 2年間にわたる住民有志が話し合いを重ね
- 保守的な農村で実現した「よそ者」の受け入れ
- 住民の計り知れない苦労と努力

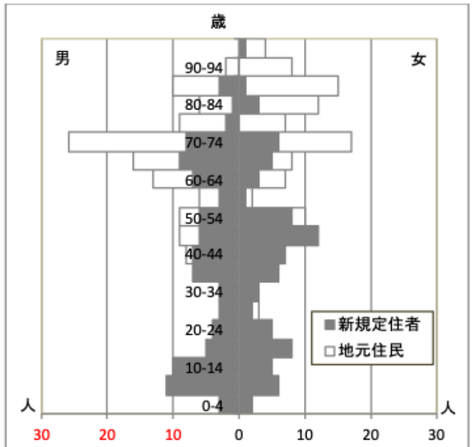


図2 色川年齢別人口ピラミッド(2023年)

移住者の割合が6割を超える。

異質なものへの理解と寛容性

先祖代々で繋がってきた暮らしの厚み

「海を見たことがない。」積み重ねられた暮らしの存在

- 集落に生まれ集落で暮らし集落で一生を終えた人たち

そして、里山とともに暮らしてきた人々

- 先人たちが山を切り開き築き上げてきた棚田、その周辺に広がる里山
- 大木が林立する奥山、そしてその山を縫うように流れる大小の川

これからの地域運営のあり方を模索

「いつもおおきによ」の挨拶

- 周囲から隔絶された色川地域は、人の繋がりこそが地域活力の源泉
- 自然と発せられる「おおきによ」の挨拶に、地域らしさの一端を感じる
- 「よそ者」を受け入れ、先人たちが繋ぎ、守ろうとした「らしさ」とは
- 地元住民の多くが75歳の高齢者となり、現役世代のほとんどが移住者
- 今までと同様の「地域運営」が可能かどうかが問われ始めている

２つの課題

積み重ねられた厚みのある暮らしが変容

地域の先行きが不透明

1

里山集落の持続可能性

日本全体で2019年までの4年間で１６４集落が消滅した。

農地保全、鳥獣害、学校存続など、地域の課題は様々

濃い人の繋がりの中、長年の「地域自治」の歴史がある

社会の変遷とともに暮らしが様変わりしてきた

地域運営のあり方　**地域らしさの継承**

2

里山集落の現代的価値の再発見

経済的合理性とは違う「価値観」との出会い

閉塞感や分断、貧富の格差、生きづらさを感じる社会

「地域社会」という存在の希薄化に伴う様々な弊害

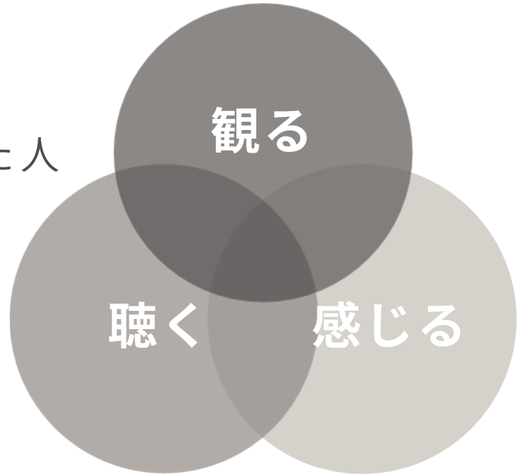
里山集落が元来持ち合わせていた役割や機能

不便は豊かである　**助け合い暮らし合う**　**非合理的な時間**

都会とはまた別の「地域」があるということ

ぜひ現場の生の声を聞いてほしい

先祖代々暮らしを繋いできた人たち
地域らしさを繋ごうと足掻く人
都会から移り住み、ここを居場所と決めた人



Mission

里山集落の現代的価値を再発見し、持続可能な地域運営のあり方を提案

里山集落の実情について、広く若者の間で情報発信を展開

日本中で、先祖代々暮らしを繋いできた里山集落が消滅していく中
「諦めない」集落が一つでも増える一助になることを期待する。

スケジュール

schedule

平日、週末問わず年中受け入れが可能。遠方のため最低１回あたり2泊3日は滞在を理想とする。

2026年6月	参加学生との顔合わせ、活動計画等打ち合わせ(オンライン）
7月	活動計画等調整（メール等）
8月 9月	現地活動（１回目）、盆踊りや寺の行事（8月12日～14日頃） 草刈り作業など住民と共同作業も可能
10月 11月	現地活動（1回目）の振り返り（オンライン） 現地活動（2回目）の事前打ち合わせ（オンライン）
12月 2027年 1月	現地活動（2回目）、運動会（10月下旬）や宮祭り（11月上旬） など行事への参加も可能
2月	現地活動（2回目）の振り返り（オンライン）
3月	報告会（現地)、住民参加型ワークショップ開催等

色川地域振興推進委員会が主体となり、
地域と連携して学生を受け入れます。